



基調講演

「宿命としての家族」

脚本家・小説家
山田 太一



■選べないものの「宿命性」が、かけがえのないもの

原島先生からすべてにわたってご配慮のある前置きをいただいて、こんなに多様な前置きでは自分が何をしゃべっても外れるし、何をしゃべってもどこかでぶつかるという感じで、どうしていいかわからないような状態でお話するわけですがそれでも。

はじめに家族というテーマを聞いたとき、宿命性というものに注目しました。家族は選べないと原島先生もおっしゃいましたが、本当に選べないんですね。病気とか顔も選べない。こういうのは家族のせいではないかもしれないけれど、回り回れば、家族のせいともいえるわけですね。親のせいともいえる。病気もね。こういう、選べないものの宿命性みたいなものが、実はわたしたちにとってはかけがえのないもので、これがみんな選べたら混乱してしまいますよね。選べないことが前提にあるから、その中でわたしたちは自分を確立できると、そう思います。ですから、宿命性を前提として、どういうふうに生きていくかという話になるのではないかなと思って「宿命としての家族」ということを申し上げました。

顔が選べないことについては、原島先生が以前のシンポジウムでテーマになさっていて、それがとても面白かったのです。同じ人でも、幼年期、青年期、中年期、そして老年期で、顔がどんどん変わっていくわけですね。それはすべて宿命性によるのではなくて、人生をどう生きたかということが、顔に反映してくるわけですね。

広い話をしますと、2300年ぐらい前に縄文時代から弥生時代になりました。けれども、それは瞬間的に変わったわけではなく、だんだんと縄文から脱していくようだったと先生は語っていらっしゃる。一時代の中での変化はもちろんあるけれども、平安時代とか昭和時代とか、顔はそれぞれの時代ごとに変化しているそうなのです。人間はいろいろなものを背負って生き

ているんだなと思いました。

選べないといえば、わたしは身長が160cm ちょっとしかないんです。今は縮んでいるから、もっと小さいかもしれません。なにしろ戦争中の食べ物のない時代が成長期だったので、栄養失調でした。子ども時代から大学へ入る頃までは、食べ物がなかったんですね。

■それぞれの家族は、それぞれの現実に即して生きている

子どもの頃、わたしの家族は浅草六区で小さな大衆食堂をやっていました。当時は、住み込みで奉公している小僧さんたちが、年に1回か2回、休暇を取って実家に帰る「藪入り」という風習がありまして、彼らが「お金を握りしめて」浅草へ遊びに来るんですね。でも、一流の店には入りにくい。そんな彼らにとって、うちは「ちょっと安そうだな」と思って入れる店でした。

狭い店でしたが、従業員がそんなに必要なかと思うほどたくさんいて、父も母もすごく忙しかった。わたしはそのような環境で育ちましたから、食事といえば、店のメニューを食べていたのです。ですから家庭料理というもの知らなかった。

戦争が始まると、下町には空襲の際の避難場所がなかったため、うちがあった何丁目だかの広い区画を取り壊して避難場所にすることになりました。国の命令ですから聞かねばならず、引っ越す必要に迫られたのです。その頃は食糧難で食堂どころではなくなっていましたから、食堂をたたみ、地方へ疎開をしたのです。そのあと、疲労で母が亡くなり、二人の兄も肺結核で亡くなり、小学生のわたしと10歳上の姉、それから妹、そして父が残されました。姉が母親代わりになったのですが、そのとき彼女は、ご飯を作ることを知らなかったことに非常にショックを受けたみたいです。それまでは店のメニューを勝手に選んで、今日はコロッケ、明日は親



子井、みたいに食べていたので、食事の作り方を知らなかったんですね。ですから家族というのは、育ちによって相当違うと思います。今、いろいろなご家族に話を伺うと、サラリーマンの家族には普遍性があるみたいですが、わたしの家みたいな特殊な育ちというのは、ほかの家族のあり方と符合するところがほとんどないほど、家族というのはいろいろで、それぞれの家族



の現実に即して生きていたんですね。

家族に関して、わたしには子どもの頃の強烈な思い出で、今でも悪夢のように覚えていることがあります。母が亡くなったあと、ちょっと遠い親戚のお婆さんの家に使いに行くことがあったんです。巣鴨のとげぬき地蔵の近くにある

家でした。その家は親戚の中では出来のいい家というか、お父さんが役人か何かで、息子さんが旧制の中学に行っていて、とても輝かしいキャリアみたいに、ぼくには思えました。その家にはお嫁さんとお姑さんがいたんですが、たまたま使いに行ったとき、お姑さんがお嫁さんに対してすごく怒っていたんです。竹の物差しがありますね、あれでお姑さんがお嫁さんをひどく叩いている。お嫁さんは「ごめんなさい、ごめんなさい」と平身低頭で謝っているのですが、お姑さんは「許せない」といって、ものすごく叩いている。なぜそんなに怒っていたのかはわかりませんでした。家庭でのお嫁さんの地位はもっと上だと思っていたぼくは、呆然としてしまいました。口が利けなくて震えているぼくの目の前で、いつまでも叩いているんですね。

わたしの家は父と母と兄弟だけで、父母の上はいなかったものですから、上下関係がそういう家を見たことがなく、こんな家があるのか、すごいなと思いました。旧制中学に通っている息子さんは非常に知性のある人だったのに、自分のお母さんを叩いているお姑さんに対して、なぜ抗議をしないのか、ものすごく悔しいというか、そういう思いがずっと頭の中にあっただね。そのときは、その家ではお姑さんが君臨していたのですが、今はむしろ逆に、お嫁さんのほうが君臨しているようです。そのように、家族というのは進化していきますね。その点において、家族は変わっていくほうがいいと思いました。お姑さんがそんなに威張っていることに、子どもながらにおかしいと思いましたから。

■ドラマに込めた「結婚なんかするなよ」というメッセージ

それから何十年かたった頃、ぼくはもう一度、「こんなことがあっていいのだろうか」と憤

慨したことがあります。35年ぐらい前ですから、ぼくは40代の後半で、もうライターになっていました。みなさんの中にも覚えている方がいらっしゃると思いますが、当時、「女とクリスマスケーキは25を過ぎると売れなくなる」というギャグがありました。ちょうど自分の二人の娘が20歳前後だったので、なんてことをいうんだと、ものすごく腹が立ちましたね。みんながそれを、笑いの種にしていたんですよ。今考えるとすごくおかしいでしょう。うちの娘も、あと2年か3年たつと売れ残りか。「だったら結婚なんかするなよ」というメッセージを込めて、『想い出づくり』というドラマを書きました。女性は結婚したら子どもを産んで、それからがまた大変ですから、結婚する前に一生残るいい思い出をつくろうという内容のドラマです。女性が25歳、26歳になる前に思い出をつくろうと努力するのは、何か悲しいですが、ぼくはその頃、非常にリアルに結婚が狂っただ、と感じたんですね。

今では、先ほど申し上げた嫁と姑の地位は変わっていますし、婚期についても25歳や26歳が売れ残りだという感覚はなくなっています。世の中が動くのと一緒に“家族”も流動的ですね。とすると、“家族というものの宿命性”と簡単に言うてはいけなかな、とも思います。むしろ“一人の人間としてのそれぞれの宿命性”と言うべきなのかもしれません。

今は容姿も整形などで変えたりできるし、25歳や26歳で婚期が終わるという圧迫もありません。ですからぼくは、昔は今よりも少し厄介な時代だったと思っていたのです。ところが最近、『想い出づくり』の脚本を本にして出そうという若い人たちが現れまして、今は昔よりいいだろうというぼくに対して、彼らは「全然よくなっていない」と言うんですね。確かに、25歳や26歳で結婚しなければという圧迫はないが、決してよくなっていないと。昔はまわりがお膳立てしてくれたけれど、現在は自主性に任せすぎというか、すべてその人の責任になるみたいなどころもあるんでしょうね。結婚が難物であることについては、現代のほうが悪いかもしれないと言う人もいて、「あの頃はひどかったね」という話じゃないんですね。家族は変化しているけれども、あの頃の嫁姑問題が解決して、婚期についても解決して、どんどんよくなっていくように思いたいけれど、理屈上は女性を解放するはずの自由からは新しい重荷が生まれているというんです。議論上は見過ごされていることがあとに残っていく。人生の問題はそんなに簡単に解決することじゃないんだと、改めて感じました。

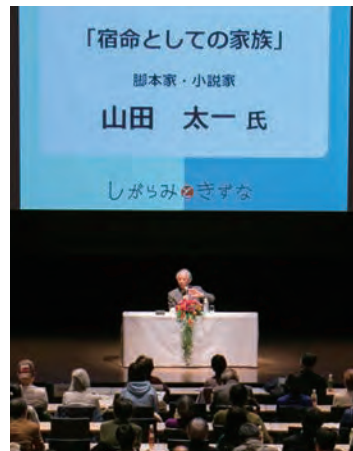


■必要なのは「自分は一人なのだ」と覚悟すること

現在の家族に関していばん大きい問題は、原島先生もおっしゃっていましたが、高齢化でしょう。今は、長生きすることがいいことだとは言えなくなってきましたね。わたしもその高齢化の一人です。最近はお葬式はもちろん、知人が入所する高齢者施設を訪ねることも多くなりました。そうすると、「死にたい」と言う人がけっこういるんですね。もう、どうしたらいいかわかりません。「そんなこと言わないで元気でいろよ」なんて、言えませんでしょ。「うーんそうか、ぼくも死にたいよ」ぐらいしか返す言葉がないのです。実際、家族でこういう問題を抱えている方はほんとうに大変だと思います。

『愛、アムール』という、老夫婦を主人公にしたフランス映画がありますが、この映画では病気で苦しむ奥さんが「わたしを殺して」と夫に頼む。そう言われても、殺したら殺人者になってしまうので殺せない。でも死に対する妻の欲求はとて強くなっていくので、とうとう最後には、妻の顔に枕を押しつけて殺してしまうのです。そこで場面が変わり、家に踏み込んだ警察が自殺している夫を見つけるというラストなんですが、これなど映画だからできるけれど、実際自分がそんな状況に置かれたら、どうしたらいいかわかりませんね。

高齢のお母様がいる友人のところに、お見舞いに行ったときのことで。ちょうどお母様がデイサービスに行っているというので、雑談をしていたら帰ってきました。デイサービスのスタッフに体を支えられて玄関まで送り届けてもらったら、そこでスタッフは帰っちゃうんですよ。その後は家族に任せることになっているんですね。ぼくが手助けをしようと思ったら、家族の人が「やめてください」と。こういうところで妥協するとどんどん甘えるし、這って自分の部屋まで行くのはお母さん本人の希望だから、手助けしないでほしいと言うんですね。でもね、歩けないんですよ。ハッ、ハッって辛そうに這いながらわたしに「ああ、よく来てくれたね」って。



そんな姿を家族たちは見ているだけなんです。なんだから、ものすごいリアリズムというか、現実を目の当たりにしたように思いました。確かにいちいち手助けをしていたら、手伝うほうも、助けられるほうも、くたびれてしまう。変な親切心で手伝わないというのは、介護される側も了解のうえなんですよ。家族の問題は、こういうところまできているんだと思いました。

家族にとって、介護は負担です。なかには「こんなことをしていたら壊れてしまう」「放り出したい」と思っている家族もいるかもしれません。でも介護問題は、家族と切り離して考えることはできません。ですから一歩踏

み込んで、人は結局は一人で生きていく、そして一人で死んでいくんだということを覚悟しないといけませんね。覚悟できないという方も、もちろんいらっしやるけれども。

■いろいろなものに刃を突きつける「家族のリアリズム」

今のように、これほど老人が増えた時代はありませんよね。今までは、老人が「ほどよく死んでくれていた」わけで、わたし自身も「ほどよく死ぬ」と思われているかもしれませんが、「ああそうですか、ではほどよく死のう」と思っても、すぐには死ぬませんものね。そういう中でどうやって生きていくかが、老年の難問にして知恵のしぼりどころだとは思いますが。

たとえば、定年後に女房と旅行することを楽しみにしていた人も、そういうチャンスが何度もあると飽きてしまう。船で外国をクルーズしながら老後過ごす人もいるけれど、3日も4日も波しか見えなかったり、クルーズのメンバーの中でイヤな人を仲間外れにしたり、そういう話を聞くと、どこまで人生を楽しんでいるのかなと思ってしまう。

ぼく自身も含めて、本当に幸福なんだろうかと問いかけてみると、だんだん老後に対しては厳しくならざるをえない。リアルになっていかざるをえないんですね。今はまだ幻想などに頼ったりしてごまかすことはできるけれども、だんだんごまかしが利かなくなるという恐怖のようなものを感じます。

老後の話にしぼりすぎたかもしれませんが、老後にどう生きていくかということに対しては、いずれ答えが出てくるのでしょうか。ぼくにはまだ見えていませんけれども、すでに答えを出している人もいっぱいいると思います。今、家族の問題を考えると、現実というリアリズムが、非常にいろいろなものに刃を突きつけているように思っています。



山田 太一（脚本家・小説家）

1934年東京浅草生まれ。早稲田大学卒業後、松竹入社。主に木下恵介監督の下で助監督を務める。木下監督企画のテレビドラマ「3人家族」で初めて脚本を執筆し、高視聴率を獲得。その後独立し、「男たちの旅路」（1976年）「岸辺のアルバム」（1977年）大河ドラマ「獅子の時代」（1980年）「早春スケッチブック」（1983年）「日本の面影」（1984年）など数々の傑作ドラマを手がける。ドラマ脚本の他、1983年には戯曲「ラブ」を初めて執筆。その後「砂の上のダンス」「黄金色の夕暮」など舞台の脚本も多数手がける。1988年には小説「異人たちの夏」で山本周五郎賞を受賞。近年では、「山田太一ドラマスペシャル」として、数々のスペシャルドラマ作品を発表。2016年11月には東日本大震災から5年後の人々を描いた「五年目のひとり」が放送され話題となった。